



「戦後八十年 羽村の寺の昔とこれから」

今年(戦後八十年、昭和百年)でいろいろなことが、ふりかえられています。そこで、羽村の寺のことを書きます。

私事からですが、宗禅寺の先住職俊諦和尚は昭和二一年に住職となりました。その頃、一峰院は桃源和尚、禅林寺は守山和尚、禅福寺は碩巖和尚さんでした。戦後の貧しい時代を和尚さん方は、役場に勤め、教員をされ、パートに出たりと、それぞれお寺や家族を守るために、大奮闘をされていました。檀家も少なく寺の収入だけでは維持できなかったからです。日本国中の方々の努力によって、経済も安定し、今では、お寺の収入で寺の維持が可能になりました。ありがたい事です。

その後、寺は正純禅林和尚、正俊宗禅和尚、岱山一峰和尚、泰文禅福和尚に引き継がれ、先代の継承から発展充実をむかえることにな

ります。

特筆すべきことは、昭和五三年にこの四人の和尚によって羽村臨済会が発足したことです。ほぼ五〇年になります。

羽村の和尚さん達が、ひとつになつて活動をしていくというものでした。

最初にしたことは、各寺院持ちまわりの坐禅会でした。禅林寺さんから一峰院、禅福寺、宗禅寺へと、一年交代でした。おかげで羽村の多くの方が坐禅をしてくれました。和尚達は、禅宗の特徴のようになっている托鉢も始めました。歳末助け合い托鉢、難民救済托鉢と、年二回、この托鉢には近隣の和尚さんにも応援に駆けつけてくれました。坐禅会を源にして年一回の「禅の旅研修会」も那須雲巖寺を始め年一回、多くの所に行き、交流を深めました。一峰院の岱山和尚の下では和尚

の自主勉強会もしていました。その中でも特筆すべきことは、禅福寺さんの坐禅会の中から立ち上がった「羽村燈籠流し」でした。各寺院の檀家さんたちが、それぞれ役割を分担され、見事な展開をしてきました。現在は各寺院でそれぞれの活動に終息しています。残っているのは昭和五六年から発行のこの

「慧光」誌のみとなりました。

お寺の檀家さんも増加し、それぞれのお寺の和尚さんは外へお勤めする必要もなくなり、各目、忙しくなつた寺を維持することになりました

先年、正純禅林和尚さまが亡くなり、正俊宗禅和尚、泰文禅福和尚も高齢となり、又岱山一峰和尚は御自身の研究生活のため、寺を離れました。

今羽村の寺は、啓純禅林和尚を筆頭に、義紹一峰和尚、和正宗禅和尚、尚玄禅福和尚へと移り変わりつつあります。

代が確実に代わっていくと共に、時代も変わりつつあります。少子高齢化のもと、墓じまいや直葬、家の後継者のこと、新しい課題がふえています。若い方々、檀信徒の方々と共に、寺や地域の未来のために大いに奮闘をしていただきたいと期待しています。

(宗禅 正俊)



禪語に学ぶ

出来ない

決めつけない

数年前、アメリカで一〇四歳の女性がスカイダイビングに挑戦したニュースを見ました。私は高所恐怖症なので、世の中にはとんでもないおばちゃんもいるものだと驚いた記憶があります。

また、国内では八十代の女性がスマートフォン向けのアプリを開発し、世界最高齢のプログラマーになったそうです。お二人とも高齢でありながら、年齢を感じさせないチャレンジ精神を持っていることがよくわかります。

歳をとりますと、なかなか新しいことにチャレンジしようという気持ちが出てこないものです。しかし、このお二人を見ていると、いつでも何にでも挑戦しているんだという勇気が湧いてきますね。

そこで、今回は勇気がでるような禅語を紹介させていただきます。

無可無不可

(可も無く不可も無し)

「可も無く不可も無し」は、「良くも悪くもない状態」、「普通・平凡」といった意味で使われていますが、元々の意味はそれとは大きく異なります。

「可も無く不可も無し」は、「論語・微子篇」が出版であり、孔子がいった言葉の一節です。ここでは、「分別や執着を離れ、可も不可も越えた境地で何事にも対処すること」という意味でした。

つまり、「これは良い、これはダメ」と初めから自分の判断で決めつけず、何事にもまっさらな中道の精神で向き合う、という意味です。

善悪や苦楽、好き嫌い、出来る出来ないなど、初めから決めつけてはいけないう、ということです。

何か新しい物事を始めようとした時

に、「自分には無理そう」や「今やつても遅い」と、チャレンジする以前から諦めた経験はありませんか？まず、その「決めつけ」を一度やめてみてはいかがでしょうか。この「決めつけ」から解放されると、自分の可能性が大きく広がることでしょう。

「無可無不可」は、偏った考えを捨て、決めつけから自由になれる言葉です。限りある人生の中、様々なことには是非チャレンジしてみてください。

(禅福 尚玄)



禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟

XXI

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、

偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話をさせていただきます。

鉄舟の剣4

先号にて「誓願」の厳しさについてお話ししました。鉄舟が誓願者に対して垂訓したものが「全生庵記録拔萃」に載っています。それを現代文に訳しますと

「剣法というものは実地の場に臨んで死生を決断するところの道である。それを近頃では、遊戯か競技のように軽く考えて、ただ小手先の技を比べる勝負に走っ

てしまい、実地の場に臨んだときのように、死力をつくす者が殆んど見られない。当道場ではこのような弊害を改めるために、数稽古を行ない、各々、身心の力のあらん限りをつくして、実際の用に立てようとおもうのである。

この稽古をする者は、初めのうちはいつもの試合のようにおもっているようだが、数百回立切りの試合をやっているうちに、だんだんと本当の真剣勝負の気合になってくる。これはひとえに必死真剣の精神力の発露と見るべきである。それでこそ「実地の剣法」ということができる。そういう心で修行しなければ、たとえ何十年修行したところで、それはササラ踊りの類いであって、真剣の場の用に立つものではない。そういうわけであるから、このたび数百回の試合を行なつて、人間の本当の働きを試してみることにした。各自、よろしく一命を投げ出して、発憤勉勵して修行してもらいたい。

不肖私は二十四歳の時、一週間立切り

千四百面の試合をしたが、すこしも疲労とか衰弱とかを感じなかった。いったい、剣法というものは、勝負を争うことはいうまでもないが、肝心要めのところは心を練り鍛えることである。その理由如何となれば、心というものは元来無限絶対のものであるから、ここまでという局限がない。したがって、その「心」でもって相手に対し、その「心」を働かして技を行なうときは、たとえ幾日試合をしても疲労したり、衰弱したりする道理はないのである。修行者はこの辺の道理をよくよく工夫して、大いに頑張つてもらいたい（大森曹玄著「山岡鉄舟」より）

少し長いのですが引用しました。正にこれが鉄舟の剣に対する想いであり、哲学なのだと思います。

厳しすぎると思われる「誓願」ですが、その裏付けとして鉄舟にはこの様な想いがあつたのでした。

以下次号（一峰 義紹）



禅寺雑記帳

◆写真の書は臨済宗中興の祖、白隠禪師による「指月布袋図」です。布袋和尚が月を指さしている絵で、禅画としてよく描かれる題材です。月を「真理」や「悟り」に見立て、それに気付かせる為の指は「言葉」や「お経」を表しています。指は月を見る手段に過ぎず、どれだけ言葉と並べても、真理や悟りは表現しきれないの

に、多くの人は指ばかり見て、肝心の月を見ていないぞ、指を見ずに月を見よ、という教えを表現しています。

◆ところがこの書の布袋和尚は既に示すべき月の上にいるのです。「悟り」は自分の中にあり、自己を究明して探すべきなのに、それを他へ求めてしまう愚かさ

を表現しているのでしょう。
◆この書の賛には当時流行していた歌、「声はすれども姿は見えず
きみはふかの（深野）のきりぎりす」

の下の方が書かれています。当時の「きりぎりす」はコオロギの事です。

◆前回の盆号に羽村の坂本家に太田南畝おたなんぼが来てそこに白隠の書が掛かっていたのを見た事を書きましたが、その時は達磨だるま図にこれと同じ賛が書かれていました。

◆虫の声は聞こえてもその本体は中々見つかからない事を、悟りの真つただ中にいてもそれに気が付くのは難しいという事にかけているのです。（禅林 恭山）

